内地に在りては多年土木事業に關與せられ、山間僻地をも跋渉し、明媚なる風光に親まれたることも、山水の癖ある一因なるべし。然れども公務旅行に際しては、任意風景を樂むの餘暇なきのみならず、極めて多忙なりし先生は、常に其の日程を縮め、急遽駛馳せられしを以て、老後に至り時間の制限なく悠々として心の儘なる旅行こそ、先生の樂みとせられし所なるべし。殊に孝心深かりし先生は、母堂逝去の後に至り、始めて夫妻相携へて旅行せられ、其の旅行には輕裝簡粗を旨とし、旅舍の客室食膳の如きは敢て問ふ所に非ず、唯意に任せて飄然雲霞を友とし、各地の山水を尋ねられたるは、蓋し先生晩年の快心事なりしと思はる。其の病に臥せらるる前年、富士五湖の勝景を賞せられたるが如きは、常に人に語つて喜ばれたる所なりき。

第八章　薨去

第一節　葬儀

先生元來强健にして、病に臥せらるること甚だ稀なり、老年に及びても尚健啖人を驚かしめ、又健脚を以て自ら任ぜらる。晩年耳漸く聾し、年と共に其の度進み、遂に右耳全く聾す。蓋し耳の聾するは、世俗之を長壽の兆なりとす、然り先生頗る長壽を保たる、唯晩年稀には醫藥を用ひられざはずして全癒せられ、元氣再び旺盛に復して、古稀を過ぐるも矍鑠壯者を凌ぐものあり、依然として公私各方面の事業に關與せられ、常に多忙を極め、身に寸暇を得ざるも敢て厭はず、奔走努力せられ、大正十三年樞密顧問官に親任せらるるに及び、始めて一般事業界との關係を斷たれしが、學界及び技術界に於ける重要問題に對しては、尚先生の指導に待つもの頗る多く、常に老體を煩はせしも、先生毫も意に介せず、熱心に研究せられたるが如き、又七十九歳の高齡を以て澁澤子爵の後を承け、日佛會館理事長に選ばれ、日佛親善の爲に大に盡力せられたるが如きは、心身共に强健な

るに非ざれは能はず。又其の餘技に關しても、昭和六年梅若實の二十三回忌追善能に於て、七十八歳にて「實盛」を演ぜられ、妙技滿座をして感嘆せしめられたり。同七年冬動脈硬化の爲に惱まされたるも、翌昭和八年八十歳を迎へられ、恰も先生夫妻の結婚五十年に相當するを以て、陽春駘蕩の候を期し金婚式を擧げられんとし、關係諸學會協會亦其の祝賀會を催さんとす。偶々先生心臟性喘息を併發し、靜養に努めらるるを以て、祝賀會及び金婚式は共に中止せられしと雖、其の病小康を得れば、先生無聊を慰むるに能樂を以てし、一日自ら「鉢木」を演ぜられたるに、毫も病者の態なく、而も出來榮え極めて立派なりしが、其の興に乘じて之を演ぜられ、爲に症狀を重からしめたりと云ふ。

既にして昭和八年を送り同九年を迎ふ、時恰も寒威凜冽、先生の病に利あらず、一月七日症狀急變を來たし、衰弱頓に加はり、同月二十八日其の病俄に革る。事天聽に達し、畏くも　聖上皇后兩陛下より御見舞として葡萄酒一打を賜ひ、　皇太后陛下より生花、　高松宮、　閑院宮兩殿下より果物を賜ふ。尋で特旨を以て勳一等旭日桐花大綬章を授けらる、是日竟に澁谷區常磐松の自邸に薨ず、享年八十有一、謚して研能院殿公威日顯大居士と曰ふ。

訃音四方に傳はるや、先生を知る者皆國家の爲に悼惜せざるはなく、殊に日本工學會の如きは、其の十二學會を擧げて深く敬弔の意を表し、委員を選定して葬儀準備を進め、其の他の學會協會亦人を古市邸に馳せて斡旋奉仕する所あり、能樂師梅若萬三郎氏は來つて靈前に「江口」、觀世鐵之丞氏は「融」を謠ひ、後又梅若六郎氏は同じく「江口」を謠ひて、先生の靈を弔ふ。三十日嗣子六三氏は湯淺宮內大臣より自邸に勅使御差遣の御沙汰を拜す。

三十一日、勅使久松侍從邸に臨み、弊帛及び祭粢料を賜ひ、又　皇太后陛下、及び　高松宮、　閑院宮、　伏見宮、　梨本宮各殿下より御弔問を辱うし、且供物を賜ふ、先生誠に餘榮ありと謂ふべきなり。二月一日工學院管理長工學博士眞野文二氏葬儀委員長となり、青山齋場に於て佛式に依り葬儀及び告別式を擧行せらる、　秩父宮、　高松宮、　閑院宮、　梨本宮各殿下より花を賜はり、其の他花環、榊等を供へられたるもの枚擧するに遑あらず、流石に一代の偉人、其の德を慕ふて式に參列する者場の內外に溢れ、導師谷中大行寺住職荒居日忍師の燒香に次ぎて、　梨本宮家の御代香あり、式次豫定の如く終了を告ぐ。是日導師の歎德章を始めとし、靈前に捧げられたる弔文は、帝國學士院、日本工學會、土木學會、工學院、東京帝國大學、學術研究會議、理化學研究所、帝國鐵道協會、日本動力協會、港灣協會、日佛協會、日佛會館、東亞鐵道研究會、日本赤十字社、學士會、能樂會、其の他合計四十餘通に及びたるが、時間の都合上、帝國學士院、日本工學會、土木學會、工學院よりの四通は朗讀せられ、他は一括して之を捧ぐるに止めたり、其の朗讀せられたるもの左の如し。

歎　德　章

南無平等大會一乘妙法蓮華經眞如實際常住三寶果海の聖賢本師覺王宗祖大士來臨影嚮知見照鑑

維時昭和九年二月一日を以て樞密顧問官從二位勳一等男爵古市公威閣下葬歛の式典を擧ぐ閣下は姫路藩士にして安政元年を以て江戸邸に生る父は古市孝氏にして閣下は其の長男なり明治三年藩の貢進生として質を大學南校に執り明治八年第一回文部省海外留學生として佛蘭西巴里に於て理工科大學に學び學卒て學位を得明治十三年歸朝の後直に職を內務省に奉じ同十九年工科大學長に任ぜらる同二十一年日本最初の工學博士の學位を受く同年山縣內務大臣に隨行して歐洲諸國を巡遊し土木行政に關する制度の調査をなし歸朝の後內務省土木局長となり土木行政及び土木事業施行の組織を定む明治二十三年第一回帝國議會開設に當り貴族院議員に勅選せらる明治二十六年內務省土木技監に明治三十一年遞信次官に明治三十二年鐵道會議々長を仰付けらる明治三十五年製鐵事業調査委員長に明治三十六年東京帝國大學名譽教授に同年鐵道作業局長官に同年京釜鐵道總裁となり其鐵道を速成し以て日露戰役に資したる其功績偉大なるを以て勳一等に叙せらる明治三十九年帝國學士院會員に大正六年理化學研究所長に大正八年閣下の功勞を　御嘉賞あらせられ特に男爵を授與せらる同十三年樞密顧問官に任せらる昭和四年旭日大綬章を賜はる昭和七年從二位に叙せらる而して閣下の外國に於けるカンボジヤ國丁抹國佛蘭西國中華民國白耳義國等より各種の勳章を贈與せられたり

別して男爵閣下の偉績を叙せば工科大學第一回の學長として高等工學教育の基礎を作り又工學會の會長として永く同會のために力を竭し昭和四年萬國工業會議及世界動力會議を我國に開催せらるるに當り殊更に盡力せらる同年米國及英國土木學會同八年日本土木學會の名譽會員に推選せらる又工學院を創立し永く管理長として多年我國工學の普及と技術者の養成に貢獻し更に土木學會創立に於ける其第一回の會長として努力せらる其他工學工業に於ける全般に關し各種の調査會等に委員若くは顧問として其功績極て多し實に我國工學界の泰斗にして元老且つ恩人なり然に昭和七年冬輕症に罹り爾來澁谷區常磐松の自邸に靜養せらるること一ヶ年餘其間國手名醫の治療を加ふるも其功を奏せず天壽命あり昭和九年一月二十七日終に危篤に陷りしこと畏くも天聽に達す

大綬章を授けらる同日八十一歳を一期として安祥として薨去せらる痛恨何ぞ堪へん此事天聽に達するや勅使を

皇太后宮秩父宮高松宮閑院宮伏見宮梨本宮等の各宮家より御弔問の賜を受く之人生無上の幸榮なり然而て迂滅無常は法界の定則にして釋王既に夏林の烟となり六通の羅漢も灰身の相を示す經云是法住法位世間相常住と閣下今非滅現滅の法規に則り寂光不變の妙土に歸するものか仰願は法華經中一切の三寶如來荷擔の妙文の如く攝取引入なし給へ

維時昭和九年二月一日

大行寺三十四世權大僧正　荒居養壽日忍謹白

○

弔詞

帝國學士院會員從二位勳一等工學博士男爵古市公威君は明治三十九年本院會員を被仰付てより玆に三十年其の

間明治四十二年より大正十年に至る十二年の久しきに渉りて第二部々長の職に盡さるると共に本院學術奬勵事業の爲めに盡力せられ同事業今日の發達を見るに至りたるは君の力に負ふ所尠しとせず同事業將來の計畫等に就きては尙君の力に待つべきもの多かりしに不幸前年來病を得只管靜養に人事を盡されしも藥石効を奏せず客月二十八日遂に薨去せられたるは洵に哀惜の至りに耐へず茲に會員一同に代り恭しく弔意を表す

昭和九年二月一日　　帝國學士院長從二位勳一等理學博士　櫻井錠二

○

今茲に一月二十八日日本工學會理事長從二位勳一等工學博士男爵古市公威先生薨去せらる悲哉

先生が本邦工學界の總帥として學德並び高く功業の拔群なる一世の熟知する所にして又國家の恩賞之を實證す

我日本工學會は特に先生との關係緊密なるものあり本會は明治十二年工部大學校卒業者の組織する所にして當時本邦唯一の工業團體なりしが先生は帝國大學工科大學長たるの傍明治二十一年より本會幹事又は副會長となり會長を輔けて會務を主宰せられ大正七年故山尾子爵の後を受け會長に就任せらる大正十一年組織を變更し工學關係十二學會を社員とする現在の社團法人日本工學會成るに及び其の理事長に就任せられ以て今日に及べるものにして其の間約五十年終始一貫本會指導の任に當らる

今日日本工學會が前後半世紀の長きに亙り先生指導の下に實施せる幾多の事業殊に工學全般に關する綜合的業績を顧み飜つて本邦工學現時の盛運を思ふもの洵に無量の感慨に打たれざるは無かるべく然かも一つとして先生の學德に俟たざるものなく盡く先生の身を以て當られたる誘拔の結果ならざるはなし

今や國を擧げて非常時局に際會し本會の任務亦一層の重きを加ふるの時に當り忽然として偉大なる指導者を失ふ痛歎何ぞ堪へん嗚呼悲哉

社團法人日本工學會副理事長男爵　斯波忠三郎

○

土木學會名譽會員樞密顧問官從二位勳一等工學博士男爵古市公威君忽焉として長逝せらる

君は夙に姫路藩の貢進生として大學南校に學び明治八年佛國に留學を命ぜられ同國大學を卒業し十三年歸朝直に內務省及大學に職を奉じ內務省に在りては技監又は土木局長として本邦河川港灣修築と土木行政の基礎を確立し大學に在りては最初の工科大學々長として高等教育に盡力す後ち遞信次官鐵道作業局長官に歷任し又京釜鐵道總裁として同鐵道速成に力を致し日露戰役に對し多大の貢獻を齎し其功に依り勳一等に叙せられ次で大正八年特旨を以て男爵を授けらる君は終始一貫深く我邦の工學及工業の發達に思ひを致され工手學校及工學の各分科を網羅せる日本工學會の創設昭和四年萬國工業會議の本邦開催の如きは君の力に負ふ處甚だ多く其功績誠に顯著なるものあり殊に本學會の創立は君の發意に係り大正三年其最初の會長に擧げらる又君は貴族院議員樞密顧問官宗秩寮審議官帝國學士院會員に任ぜられ其名聲嘖々として遠く海外に聞えアメリカ及イギリス土木學會名譽會員に推擧せらるる等關係せらるる事業枚擧に遑あらず本學會は君の本邦土木工學並に事業に關する功績特に顯著なるを認め昭和八年名譽會員に推擧せり而かも本會は前途爲すべき事業極めて多く君の指導に俟つもの大なるものありて吾等の敬慕措く能はざる所なりしに今や幽明境を異にして再び其高風に接すること能は

ず洵に哀悼の至に勝へす謹て弔す

社團法人土木學會會長工學博士　眞　田　秀　吉

○

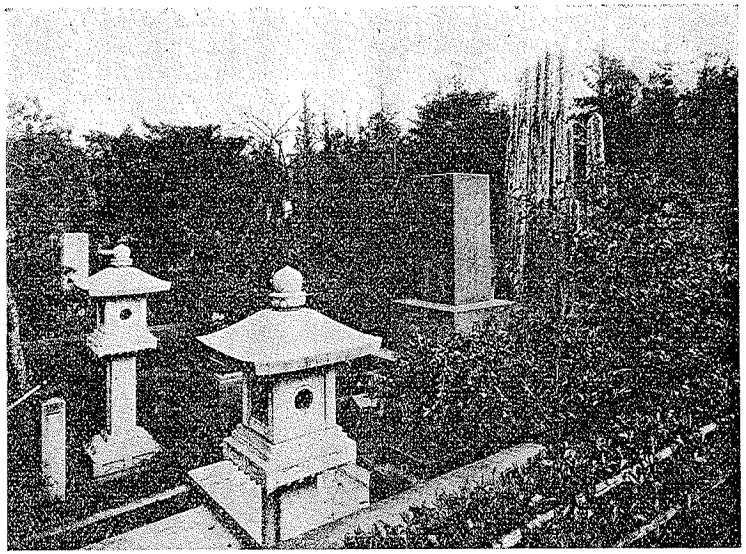
樞密顧問官從二位勳一等工學博士男爵古市公威閣下薨去せらる眞に痛惜の至なり

君は本學院の前身工手學校創立者の一人にして明治二十一年創立以來管理員となり十數年間、教員、教務主理、會計主任、監事等に歴任し同三十四年管理長となり三十餘年其職に盡瘁せられ以て今日に及ぶ其間明治二十九年築地の校舍燒失の厄に遭ふや本學院の實績畏くも天聽に達し御下賜金の恩命を蒙りたり然るに彼の大震災に會ひ再び校舍を失ふや工手學校復興會會長となり現今の混凝土建新校舍を建設するに至る

本學院は明治、大正、昭和の三代に亙り既に二萬有餘の卒業生を出し本邦教育界並に産業界に多大の貢獻をなし然かも内容の整備と誠實努力の校風とを以て今日の隆盛を致したるは實に君か創立以來四十七年間終始其樞機を掌り誠を以て導かれたる賜にして本學院の常に感謝する所なり今や溘然此訃に遇ふ哀悼の情限りなし將來永く君の德を偲び益本學院の發展を圖り以て君の英靈を慰めんことを期す茲に謹て弔詞を呈す

工學院管理長正三位勳一等工學博士　眞　野　文　二

式終つて落合火葬場に於て荼毘に附し、直ちに染井墓地に埋葬す。墓所の敷地は間口二間奥行三間の六坪にして、工事設計者は東京美術學校教授森井健介氏なり。墓石は小松石の三段より成り、墓前の石燈籠一對は日本動力協會、周圍の玉垣一式は土木學會、其の他一部の工事に關しては工學院の寄進に係り、昭和九年十二月工事竣成を告げ、先生安らかに千歳の眠に就かれたり。



染井墓地に於ける古市先生の墓所

第二節　記念事業

昭和五年先生七十七歳を迎へらるるや、先生と最も縁故深く且多年指導を仰ぎたる土木學會は、喜壽の祝賀會を開かんとし、先生の内諾を求む、先生之を辭して曰く、八十歳を迎へなば所謂金婚に相當するを以て、暫く猶豫せらるべしと、議乃ち止む。既にして昭和七年十二月、土木學會は日本工學會に諮るに、明年先生八十歳を迎へらるるに依り、陽春の候を期し壽齡及び金婚祝賀會を開き、記念品として先生夫妻の

油繪二面を贈呈し、且祝賀會席上先生の偉大なる功績に對し、記念事業を起すの計畫を發表せんことを以てす、日本工學會之に贊同し、男爵斯波忠三郎博士を委員長に、名井九介博士を副委員長に擧げ、之れが準備を進めたりしに、先生會々病あり、臨席を請ひ難きを以て、祝賀會は他日に延期し、昭和八年五月正副委員長は先生を訪ひ、洋畫家田邊至氏に委囑したる油繪を贈呈せり。

然るに祝賀會延期の爲、記念事業計畫未だ發表するに至らずして、昭和九年一月先生の薨去に逢ふ、而して先生の偉業を虔仰し、其の學德を景慕する者、各方面に涉り頗る多きを以て、土木學會の首唱に基づき、日本工學會は主催者と爲り、茲に記念事業會を起し、同年二月以來關係各學會協會と謀りて、其の準備に着手し、翌昭和十年二月に至り發起人總會を開きて實行委員を選び、發起人總代日本工學會理事長工學博士眞野文二氏を實行委員長に推し、事業を銅像建設、傳記編纂、並に其の他の事業とし、部門を募金部、總務部、銅像部、傳記部に分ち、募金部委員長に門野重九郎氏、委員に實行委員全員五十九名、總務部委員長に名井九介氏、委員に中川吉造、佐野利器、西脇吉久、松田竹太郎の四氏、銅像部委員長に塚本靖氏、委員に伊東忠太、正木直彥、平賀讓、內田祥三、森井健介の五氏、傳記部委員長に中山秀三郎氏、委員に三上參次、丹羽鋤彥、岡田竹五郎、服部漸、中川吉造、杉山直次郎、本間廣淸の七氏を推し、各委員は屢々會合を開きて事業の進捗を圖れり。

銅像建設　銅像建設地を由緒深き東京帝國大學構內に選び、大學當局の承認を得て、其の位置を工學部前庭に相し、銅像は座像とし、其の大さは等身の約一倍半とし、之れが製作は東京帝國大學講師堀進二氏に囑託し、銅像臺座の設計は關係者間に於て懸賞募集に附し、工學士渡邊仁氏の意匠を採用し、東京帝國大學營繕課長內田祥三博士の設計監督に係り、工事は株式會社安藤組之を請負ひ、除幕式を昭和十二年初夏の候と定め、其の工事に着手したるが、豫期の如く竣工し、先生の英姿を大學構內に仰げり。而して其の臺座には、左の如く文學博士鹽谷溫氏の撰文にして、宮內省御用掛工藤壯平氏の書を刻せらる。

先生諱公威。古市氏。姬路藩士族。夙立志工學。遊學佛國。歸朝奉職內務省。尋任帝國大學工科大學長。擧於帝國學士院會員。爲樞密顧問官。敍從二位勳一等。授男爵。昭和九年一月二十八日病薨。壽八十一。先生天資明敏。人格高潔。至誠奉公。一以國家爲任。好誘掖後進。最篤於情誼。博聞彊記。熟慮斷行。識人善任。深得衆心和。是所以能裁群議。收成功也。先生實本邦工業教育之鼻祖。而司鐸五十年。於治水港灣鐵道等公私事業。所盡力頗多。不讓大禹疏鑿之功。嗚呼盛矣哉。故舊門生敬慕不止。胥謀募資。建銅像於大學前庭。以傳先生之豐功盛德於千歲云。

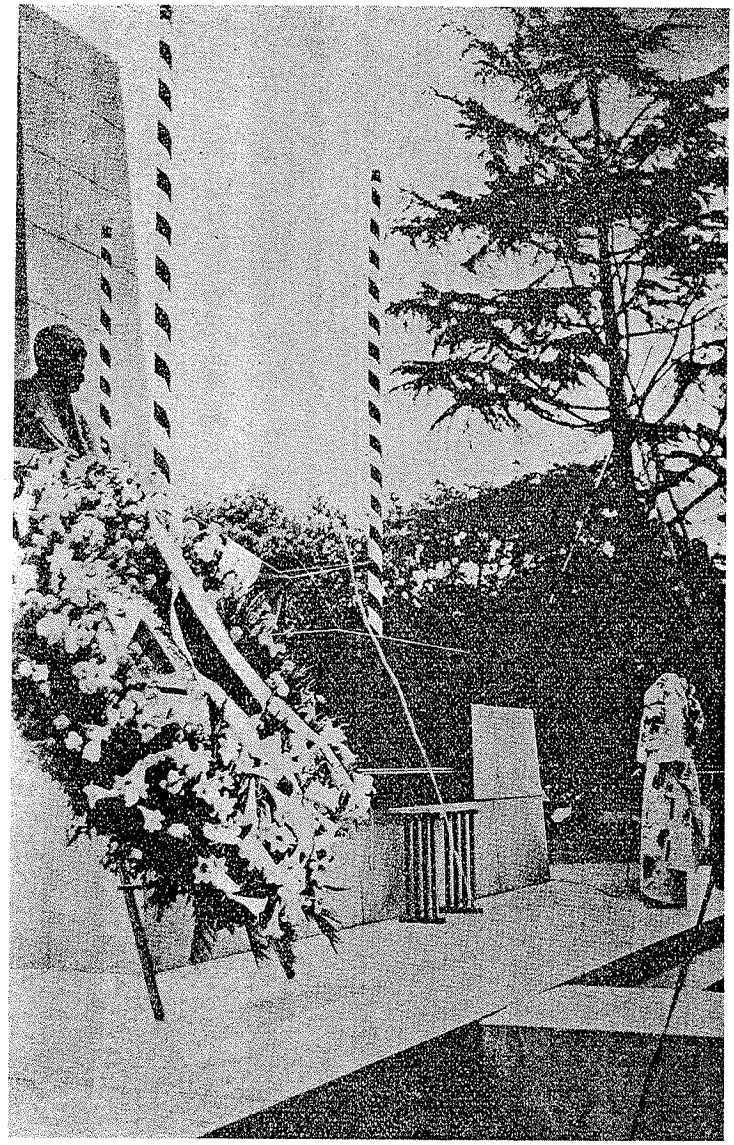
昭和十二年四月

此銅像の製作に就きて堀進二氏の苦心談を聞くに、由來銅像の大なるに從ひ、其の勞力も亦大

なるは勿論なるが、更に技術の點に於て、其の姿勢の均衡を保つ以外、特長を表現する妙所あるに非ずんば、眞に其の像を活かすを得ず、苦心の存する所實に玆に在りと云ふ。堀氏は先づ順序として、先生の幾多の寫眞中より凡そ三枚を選擇し、之に據りて初に約十分の一の小模型構圖を作り、次に現銅像の二分の一大の模型を試作し、別に頭部の模型三個を製し、之を遺族及び舊知の批判に待ち、幾たびか修正を加へて擴大せられたるもの卽ち現銅像なり。蓋し寫眞は容貌姿勢に於て唯一の資料たるも、其の風格を摑まんとするは難し、況や堀氏は曾て一たびも先生に面接せられたることなきに於てをや、乃ち之を委員諸氏及び遺族の人々の感想談に聽きて、其の特長を把握するに努め、靜に目を閉ぢて默想すれば、先生の風格自ら心眼に映じ來たるを期し、時に或は先生の容貌に類似せる街路の人を見れば、之に尾行して思索を凝らし、以て工作に施し、塑像漸く成るや、或は踞し、或は離れ、或は臥して之を見、多種多樣の距離的觀察を行ひ、更に銅像据付の位置及び四圍の環境を考慮し、其の按配宜しきを得んことを圖らるる等、苦心の容易ならざるものありしと云ふ。而して鑄造地金の砲金に就き、世上往々原料粗惡の短冊を混入する者あるに鑑み、嚴に之を誡められたるが如きは、亦同氏の周到なる用意の致す所なり。

傳記編纂　傳記編纂に在りては、各委員の資料蒐集擔任方面を、關係諸官衙、公私事業關係、學會協會、其の他に分ち、又數回各方面關係者の座談會を催し、或は諸名士を訪問する等、遺漏なからしむるに努め、之れが執筆は委員文學博士三上參次氏の推薦に依り、文學士中村德五郎氏に囑託し、文體は平易なる文章體を採り、簡潔要領を得るを旨とし、題辭は西園寺公望公に請ひ、本書の題名は古市先生の自署を選び、原稿作成と共に昭和十二年三月之を剞劂に附し、一般に配付し、又別に參考資料を一括して數部を作製し、古市男爵家、東京帝國大學圖書館、日本工學會等に寄贈し、特に先生の事蹟研究者に便ならしむることとせり。此間昭和十一年十一月中山委員長薨じ、委員丹羽博士代つて其の後を襲ぎ、鋭意盡力せられ、玆に豫期の如く本書の完成を見るに至れり。

抑も先生の關與せられし事業は、其の範圍頗る廣く各方面に涉りしも、明治中期に於ける先生活躍時代の事蹟は、當時共に參加せられし同僚、部下、其の他の關係者が概ね既に易簀せられ、今より遡つて其の眞相を確むるを得ず。加ふるに大正十二年の大震火災に依り、關係諸官衙の記錄は燒失散逸せしもの多く、爲に充分なる資料を得ざりしを以て、必ずや尙幾多錄すべき事蹟の脫漏せしものあるを懼る、然れども先生は多くの事例に徵し、誤を後世に貽すを恐れ、斷然自己の傳記編纂を不必要なりとし、堅く遺族を誡められしものあり、事情些の臆測誇張を許さざるを以て、先生の遺訓に鑑み、其の事蹟の確實なるもののみを選びて編纂し、其の他は總て之を省略せり。



古市先生の銅像除幕式に於ける令孫治子孃の除幕

銅像除幕式　昭和十二年六月五日銅像除幕式を行ふ、參列せらるる者、古市先生の遺族親戚を始め、平沼樞密院議長其の他朝野の貴顯諸名士約四百人、定刻午後二時式を開き、先づ記念事業會總務部委員長名井九介博士より記念事業の經過を述べ、銅像の建設と傳記の編纂茲に成れるを告ぐ、但し其の傳記に於ては、更に本日の除幕式記事を追加せんとするを以て、諸君への贈呈は後日に在るを諒承せられんことを求め、且事業費の決算に於て若干の剩餘金あるべきに依り、之れが使途に就きては、目下調査考慮中なりと報ぜらる。

次に古市先生の令孫治子孃は、銅像前面に進みて輕く紐條を引かるれば、幔幕颯と開き落ちて、先生の英姿悠然として現はれ、黑白花崗石の衝立を背にして、安樂椅子に靜坐せらるる其の溫容は活けるが如く、唇齒の動くものあるに似たり、滿場一齊に拍手を以て之を迎へ、新に先生の盛德偉業を追懷し、渾然たる情緒の氤氳として場内に漲るものあるを見る。

次に記念事業會實行委員長眞野文二博士は、左の式辭を朗讀せらる、滿場肅として聲なく、皆虔みて耳を傾けらる。

式　辭

我國工學界の元勳古市公威先生の銅像成り茲に除幕の式典を擧げ再び先生の溫容に接するを得るは予等の欣幸とする所なり

顧ふに時代は偉人を生み偉人は又時代を作ると稱せらるるもの實に先生に於て之を見る先生は舊姫路藩士にして安政元年江戸藩邸に生る天資明敏博聞强記夙に儕輩に擢んで明治三年貢進生として大學南校に入り同八年文部省第一回留學生として佛國留學を命ぜられ拔群の成績を以て巴里大學の業を卒へ同十三年歸朝職を內務省土木局に奉ず爾來帝國大學工科大學教授兼工科大學長內務省土木局長及び土木技監を經て遞信次官鐵道作業局長官京釜鐵道會社總裁統監府鐵道管理局長官等に歷任せり此間本邦最初の工學博士の學位を受け又勅選貴族院議員の嚆矢たり更に勅旨を以て東京帝國大學名譽教授の名稱を授けられ尋で帝國學士院會員を命ぜられ大正八年勳功に依り特に華族に列し男爵を授けらる後には樞密顧問官に任じ從二位勳一等に叙し旭日大綬章を賜ひ昭和九年一月八十有一歲を以て薨ず

之を先生の事蹟に繹ぬるに我國最高學府に於ける工學教育の基礎を定め以て今日の隆盛を致し又一般工業技術員を養成して大に斯業の發展に資し殊に河川及び港灣修築の偉績に至りては大禹疏鑿の功に讓らず其の他鐵道、建築、水道、水力發電事業等に盡瘁し更に經世の雄才は之を行政上に發揮し幾多の法規を制定し土木行政及び土木工事施行の組織を確立し又屢政府委員として帝國議會に臨み土木其の他の事業に對する重大なる豫算を成立せしむる等其の手腕の卓絕其の功績の多大なるものあり

常に工學に關聯せる各種の調査會委員會に牛耳を執り或は幾多の學會協會を指導し進んで內外に於ける學術研究の聯絡統一を圖り我國の工學及び工業の發達を世界に紹介したる功績は我工業界今日の躍進に對して與て大に力あり更に又隣邦支那の誘掖に努め日佛日白の文化の交換を始めとし國際間に於ける親善提携の實を擧ぐる等其の偉業は明治以來の文化史上に陸離たる光彩を放てり然り而して其の人格高潔清廉寡欲至誠公に奉じ一に國家を以て任と爲し事に當りて熟慮斷行機に臨みて勇往邁進し達眼卓識寬仁大度其の後進を指導するや懇切到らざるなく人を知りて善く任じ統率宜しきを得て衆望の歸する所群議を和し嚮ふ所可ならざるなく行ふ所成らざるなし若し夫れ謠曲能樂に堪能にして妙技常人に絕し更に斯道の發展に力を盡し斯界の恩人として重きを爲すが如きは又以て忙中に閑あり動中に靜ある偉人の半面を窺ふに足るべきなり

先生の薨ずるや故舊門生相共に其の偉業を虔仰し其の學德を景慕して記念事業會を起し弘く資を募りて銅像の建設傳記の編纂等に着手し發起人六百六十餘名より實行委員五十九名を選び各部門の擔當を定め其の銅像部に在りては特に斯道に經驗ある諸氏を推し建設地を由緒最も深き東京帝國大學構內とし大學の承認を得て其の位置を工學部前庭に相し之れが製作は東京帝國大學講師堀進二氏に囑託し臺座の設計は意匠を懸賞募集に採り之に改善を加へ工事は株式會社安藤組之を請負ひ東京帝國大學營繕課長內田祥三博士の周到なる監督の下に工を進め計畫當初

より二年有餘の歳月を費して其の竣工を告げたり乃ち本日の除幕を以て茲に先生の英姿を千歳に仰ぎ其の盛德を不朽に傳ふ嗚呼先生は永遠に活きたり而して予等の志是に於てか成る庶幾くは斯道の後進相率ゐて先生の遺烈に感奮し其の偉業を繼承して益々我國工業の進歩發達に努め以て國家に貢献する所あらんこと切望の至りに堪へざるなり聊か微衷を披瀝して式辭と爲す

昭和十二年六月五日

故古市男爵記念事業會實行委員長　眞野文二

次に銅像委員内田祥三博士の建設工事報告あり、其の全文を左に掲ぐ。

私から古市先生の銅像及臺座の工事に就いて、簡單に御報告申上げます。

昭和十二年二月に塚本靖博士を委員長とし、伊東忠太博士、平賀讓博士、正木直彦氏、森井健介氏、及び私の五名を委員とする銅像部委員會が設けられ、いろ〳〵と協議致しました結果、銅像は東京帝國大學講師の堀進二氏に其の製作を御願ひすることとなり、堀氏は先づ十分の一の模型を作つて、大體の姿勢、形を研究せられ、次で等身大のものに就いて考究を重ねられました上、更に之を引き伸ばして、等身約一倍半大の原型を作られたのであります。

銅像の前方に嵌め込んであります銅像銘の文章は鹽谷博士の撰、文字は工藤壯平氏の書で御座ります。

臺座の方は其の設計施行を私に一任せられましたので、愼重を期する爲、其の設計圖案に就いて、半公開の懸賞募集を試むることと致し、伊東、塚本の兩博士及び私が審査員となり、多數の應募圖案の中から、渡邊仁、吉田鐵郎、岡田捷五郎三氏の分を當選と定め、其の内の渡邊仁氏作のものに基きて實施することとし、それに極僅かの變更を加へて、實施設計を作製しました。そこで都下著名の請負業者數名に付入札致させまして、株式會社安藤組に工事を依頼することに決定、十一年九月契約を了し、昨年十一月末に出來上りました。

壇上左右一對の植木は、臺座の體裁に密接の關係がありますので、其の種類に付愼重に考慮致しました結果、伽羅を以て原設計の大さ、形狀に作ることに決めまして、昨年秋之を物色し、豫め形を作つて準備して置きまして、本年五月十二日に植樹を了りました。尙臺座の後方及び左右にも多少の植樹を致しました。

續いて五月十五日に銅像の据付を終り、御覽の通りに出來上つたので御座ります。

銅像は原型から鑄型に依り鑄造しましたもので、其の重量は約四百貫あるそうでございます。

臺座の主體は鐵筋混凝土造りで、これに黑花崗石及び稻田花崗石を貼り付けたので御座ります。各部の寸法等は繪葉書及び説明書に付いて御覽を願いたいと存じます。

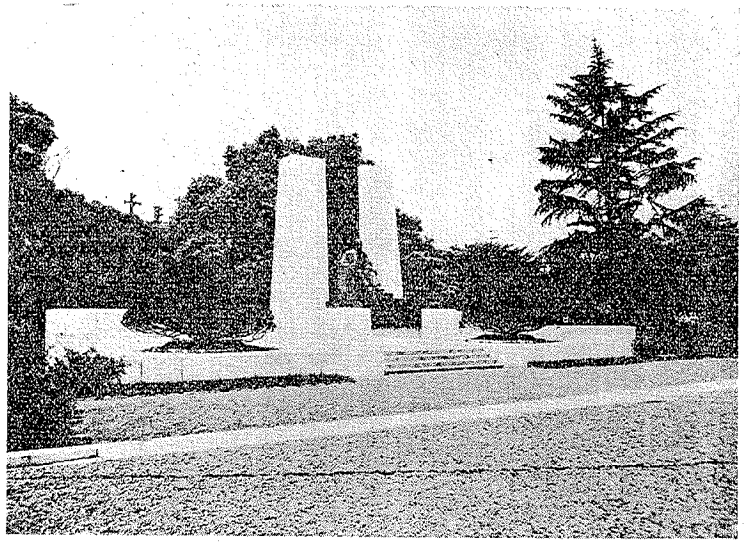
古市公威先生銅像建設工事概要

銅　像　高さ約六・一〇米、底面約三平方米、重量約一・五瓲。

臺　座　間口約一九・三九米、(六十四尺)、奥行約七・一八米(二十三尺七)、基壇高さ約〇・六〇米(二尺)、像座高さ約二・一二米(七尺)、背面衝立高さ約七・二七米(二十四尺)。

臺座構造概要　構造主體は總て鐵筋混凝土造にして、基礎の深さは約二・四二米なり。臺座の設計は、廣さ約一一五平方米の基壇を設け、其の前面中央には階段を附し、後方及び左右には石欄を廻らし、中央背後には高き衝立を有す。基壇中央に像座を設けて銅像を据え、像座の左右の基壇上に伽羅一對を植樹す。

使用石材は、像座及び衝立の中央に廣島縣産黑花崗を本磨きとして使用し、其の他は全部茨城縣産稻田花崗を小叩き仕上として使用せり。石材使用量は約五〇〇立方米なり



東京帝國大學工學部前庭に於ける古市先生の銅像全景

次に中山秀三郎博士の後を承け編纂委員長たる丹羽鋤彥博士の傳記奉奠あり、此傳記は本日の銅像除幕式記事を掲載せずと雖、古市先生の事蹟は網羅して餘蘊なく、本日の式典を機として、製本裝幀したるものなり。博士徐ろに銅像前面に進み、恭しく白木の机上に捧呈せらるれば、滿場の拍手又盛に起る。

次に來賓樞密院議長平沼騏一郎男の在の祝辭朗讀あり、一同襟を正して之を謹聽せらる。

祝　辭

樞密顧問官男爵古市公威君と永訣してより早く既に三年の歲月を經たるも事尙昨の如く追懷の情常に新なるものあり

君夙に志を立てて工學を佛國に修め歸來主として工業教育及土木行政の要務に與り拮据黽勉終始渝らず遂に工業に關する學術の耆宿、實務の權威として深く力を學校の開設學會の組成科學研究機關の指導等に效し更に土木、治水、港灣、發電水力、鐵道等の開發に盡瘁し以て國家社會の進運に寄與せられたる偉大なる功績は今之を枚擧するに遑あらず晩年樞密顧問官に親任せられ渾然大成せる學識經驗を以て克く密勿啓沃の重責を竭され其の勳勞の顯著なるは固より言を要せざる所なり且つ君は資性高雅にして名利に淡く氣宇宏大にして衆說を容る世人の君を稱

讃して措かず後進の君を景慕して已まざるもの亦故ありと謂ふべし

曩に君の易簀せらるるや同志胥謀り其の偉功を永遠に傳へ高風を不朽に遺さんと欲し地を因緣最も深き此の東京帝國大學工學部の前庭に卜して君の銅像を建設せんことを企畫し今や其の工を竣へ茲に除幕の式典を擧行せらる洵に慶賀の至りに堪へず仰で之を見れば溫容生けるが如く諄々人に向つて語らんとするに似たり冀くは此の英姿をして單に學苑の美觀たるに止まらしめず永く後學を提撕して學術の進展國運の隆昌に貢献するの目標たらしめむことを聊か一言を叙して祝辭とす

昭和十二年六月五日

樞密院議長男爵　平沼騏一郎

次に東京帝國大學總長長與又郎博士の祝辭を兼ねたる左の挨拶あり、一同轉々其の感懷を深うせり。

故古市公威男爵銅像除幕式挨拶

故古市男爵記念事業會が、先生の偉大なる遺業を追憶し、其の偉績を永く顯彰せんが爲に企てられたる事業の一として計畫せられました先生の銅像建設工を竣へ、本日茲に盛大なる除幕式を擧行せらるるに當り祝辭を呈することは、私の最も光榮とする所であります。

先生の經歷、事業等に就きましては、此所に御集りの方々の能く御承知のことでありまして、私が改めて申上ぐる必要は無いと思ひますが、我國現代工學教育の開祖であり、工業界の大先達であり、而して我東京帝國大學の創業時代に於ける大なる功勞者である古市先生の記念像が、大學構内に建設せられましたことは、誠に意義深いものがあると思ひますので、一言所感を述べたいと思ひます。

我國現代文化の建設は、明治初年以降各方面に於て現はれたる多くの達識有能の諸先輩の苦辛努力の賜でありまして、之等の人々は實に今日の國家隆昌の基礎を樹てられたのであります。而して工學工業方面に於ては、古市先生は其の最も偉大なる功勞者であります。先生が明治三年姫路藩貢進生として大學南校に入られてから、昭和九年一月薨去せらるるに至るまでの其の長い一生は、實に輝かしい歷史の繼續でありまして、明治八年には嚴選せられたる第一回の文部省留學生十一名中の一人として佛國に留學せられ、拔群の成績を以て巴里大學を卒業せられ、明治十九年東京大學が工部大學を加へて帝國大學と改まるや、先生は初代の工科大學長及教授として、前後十二年鋭意學部の統制、學科の整備、學生の訓育に當られ、最高工學教育の基礎を確立せられました。明治二十一年學位令が制定せられて、法、醫、工、文、理の五學科に各五名の最初の學位受領者を見たる際、その一人に選ばれ、また二十三年には最初の勅選議

員の一人たるの榮を擔ひ、三十六年には工學關係に於ける最初の名譽教授に推薦せられ、三十九年帝國學士院の制度改正に當つて會員となり、次いで第二部長に推されて居られます。また先年東京に開かれた萬國工業學會は、從來我國に開催された國際的學會として最大のものであつたと思ひますが、先生は其の會長に推されてゐます。斯くの如く先生は夫々の時代に、斯界に於て常に極めて有能なる指導者として、最高峯を歩んで來られました。尙工業行政方面、一般の工業教育、國內的及國際的各學會、協會等の建設及び其の發展の爲にも、該博なる專門知識と、非凡なる經綸の才と、大なる抱擁力とを以て、多くの貢獻を致して居られます。

先生は實に一人にして優れたる學者であり、教育家であり、技術家であり、また行政家であり、其の行く所何れも可ならざるなく、立派な成果を收めて居られます。先生が國家から榮位榮爵を拜されたことは洵に當然のことであります。今日我國の工學工業の發達興隆實に目覺ましいものがあります、誠に國家のために慶賀に堪へません。恰も此秋に於て先生の銅像が本學內に建設せられ、先生の遺業を記念し、且後進及學生景仰の一目標を得ましたことは、教育上からも誠に結構なことでありまして、大學としても感謝に堪へない所であります。之を以て御挨拶と致します。

最後に男爵古市六三氏は、遺族及び親戚一同を代表し、感激に滿ちたる容色と謹嚴なる態度を以て、左の如く謝辭を述べられたり。

父が生前から御懇情に預りました皆樣の御蔭に依りまして、此處に銅像が建設せられ、本日多數の遺族がお招きを受け、この盛大なる式に列するを得ましたことは、誠に光榮の至りで御座いまして、深く御禮を申上げます。

又この建設事業に直接御關係の方々が、眞野名井兩博士を始め、父の極めて御厚誼を願つた方方であります事は、父の感激を深く致します事と推察致します。亡くなりまして茲に三年、この生けるが如き銅像を緣りも深き大學構內に見まするに就きまして、私共遺族の喜びは絕大なるものが御座いますが、父が永久に坐つて居ります此臺座の意匠が渡邊仁氏の御考案に係り、銅像が堀先生の御力作に成り、且諸般の設計監督を內田博士などが熱心に御引受け下さいました事は、父の喜びと感謝を猶更大きく致しました事でありませう。尙只今丹羽博士に依りて、父の傳記を銅像の前にお供へ下さりましたが、是れ亦洵に有り難く、深く御禮申上ぐる次第で御座います。此機會に於て一言申上げ、特に皆樣の御諒承を願つて置きたい事がございます、それは父の病中最早再び起つことが出來なくなりました際、私に向つて申しますには、自分の死後或は傳記編纂の企てがあるかも知れないが、自分は傳記を編纂される程の功績はない、近頃多くの傳記が出版されるが、其の眞を得たものは誠に尠ないといふことだ、自分もさう感じた事

が尠なくない、元來仕事といふものは一人で出來るものではなく、多くの人々の力に依つて始めて成就するものであるから、それを一人で爲た樣に書き立て、他人の功勞を沒却せしめるやうでは、後世を誤ることが甚しい、而かも大抵の傳記は得て左樣に成り勝ちであつて、殊に甚しいのは他人のした仕事が其の人のした仕事の樣に書かれたものすらある、自分の傳記の編纂の話が出た際は、固く御斷りをするやうにと、懇々申し渡されたのであります。曩に父の爲に記念事業會を起され、其の事業の一として傳記の編纂せられる御計畫のある事を窺ひました時、實は私は非常に惱みましたので御座います、然るに委員の方々は、傳記の編纂は銅像の建設と共に、先考に對する故舊門生等の情誼の發露で、決して先考の德を傷けるやうな事はしない、先考の御趣意は充分汲み取つて、注意をして編纂するから是非にとの御話でありましたので、私も其の御厚情に絆され、父には相濟まぬとは知りつゝも御同意を申上げた次第であります。御暇でもあらせられ、父の傳記を御讀み下さいます時、何卒父の意のありし所を御諒察下さりますやう、切に父に代つてお願ひ申上げます。時局多端の折柄、樞密院議長閣下始め多數の皆樣御參列下さりまして、斯かる盛大なる式典を擧げられました事は、父は固より地下の母も大に喜んで居ります事と存じ、謹んで重ねて厚く御禮を申上げます。

謝辭茲に畢るや、總務部委員松田竹太郎氏は祝電を披露せられ、芽出度く盛會裡に式を閉ぢ、暫く休憩の後茶菓の接待に移り、銅像を前にして歡談湧くが如く、一同名殘りを惜みて散會せしは午後四時頃なりき。

○

因に云ふ、本會發起人は左記六百六十一名にして、實行委員は五十九名なり。

故古市男爵記念事業會發起人氏名（五十音順）　○印は實行委員

安藝杏一　安久津成雅　安達辰次郎　安藤又三郎　青木鎌太郎　青木周三　青柳榮司
○青山士　青山鼎之助　青山秀三郎　赤間信義　明石東次郎　秋保安治　○秋山武三郎
秋山正八　淺川權八　淺野應輔　淺野總一郎　淺野良三　○朝倉希一　朝山榮二
○厚木勝基　姉崎正治　荒井賢太郎　荒川文六　荒木寅三郎　有賀長文　有坂鉛藏
有田寛治郎　有馬良橘　有吉忠一　井上豊太郎　井上足太郎　井上角五郎　井上禧之助
井上敬次郎　井上孝哉　井上篤太郎　井上二郎　井上匡四郎　井上親雄　井上哲次郎
井上秀二　井口庄之助　伊澤多喜男　伊東貞興　○伊東忠太　伊東奎二　伊藤長右衞門
伊藤文四郎　生駒勇　池田賢太郎　池田讓次　池田成彬　池田勝藏　池田菊苗
池野成一郎　石井善七　石川鼎　石塚英藏　石原健三　石原寅次郎　石本己四雄
石渡敏一　石渡信太郎　石藤豊太　磯村豊太郎　男一木喜德郎　市村讃次郎　稲垣平太郎
稲田三之助　稲田龍吉　稲畑勝太郎　犬飼柔吉　今井五介　今泉安之助　○今泉嘉一郎

今村明恒　岩瀬德藏　岩田成實　岩原謙三　鵜飼賢一　鵜瀞新吾　上田寧
上田恭輔　上田萬年　植村俊平　植村澄三郎　牛塚虎太郎　潮惠之助　内田勝司
内田信也　○内田祥三　内山熊八郎　海野力太郎　梅野常三郎　梅野實　江崎一郎
江村義三郎　遠藤藤吉　小川清次郎　小川梅三郎　小倉正恒　小澤信之甫　小田莊吉
小田切延壽　小野塚喜平次　○小平浪平　尾形次郎　尾崎行雄　越智誠二　緒明圭造
緒方勝一　織田萬　大井清一　大石鉄吉　大川平三郎　大久保忠親　大熊喜邦
大倉粂馬　男大藏公望　○子大河内正敏　大越諄　大澤三之助　大幸勇吉　大塚晃長
大塚榮吉　大島義清　大島十郎　大角亨　大園榮三郎　大瀧幹正　大竹貫一
大西一郎　大橋新太郎　大林義雄　大藤高彦　大村鋼太郎　大森治一郎　大屋敦
太田光凞　太田峰尾　太田丙子郎　○岡胤信　岡喜七郎　岡上彦三　○岡田竹五郎
岡田和一郎　岡野昇　岡本桂次郎　沖巖　荻野元太郎　奥田定一郎　奥村長作
加藤勇　加藤榮　加藤寛治　加藤敬三郎　加藤清一　加藤直法　加藤正治
○加茂正雄　鹿島精一　鹿村美久　嘉納治五郎　掛谷宗一　景山齊　筧正太郎
笠井愛次郎　笠井眞三　笠原敏郎　片岡安　片山貞松　勝田銀次郎　葛西萬司
桂辨三　神田禮治　神津俶祐　鴨居武　金子喜代太　金子恭輔　金原信泰
川中近次郎　川邊孫四郎　河田烈　河村金五郎　川口虎雄　川崎舍恒吉　川田豊吉
○河村曉　木下益治郎　木下立安

喜安健次郎　菊池恭三　岸金三郎　○岸本綾夫　北浦重之　北澤惇夫　北村耕造
伯清浦奎吾　久原房之助　○久保田敬一　久保田省三　草間偉　串田萬藏　國澤新兵衛
窪田靜太郎　倉知鐵吉　倉橋藤治郎　藏重哲三　子栗野愼一郎　栗本勇之助　黑澤明九郎
黑田泰造　桑木嚴翼　小金井良精　小島榮吉　小平保藏　小谷清　小寺房治郎
小橋一太　小林一三　小林金平　小林久平　小柳津正藏　小山友直　伯兒玉秀雄
五代龍作　五島慶太　伍堂卓雄　上妻博　河本重次郎　香村小錄　高壯吉
男近藤滋彌　近藤茂　近藤次繁　佐伯定胤　佐々木重雄　佐々木忠次郎　佐々木六郎
佐藤清勝　佐藤三吉　男佐藤昌介　伯佐野常羽　○佐野利器　齋藤眞　齋藤省三
齋藤晴五　齋藤大吉　齋藤恒三　子齋藤實　阪井德太郎　男阪谷芳郎　坂田九郎
坂野鐵次郎　坂本彭之助　坂本助太郎　昌谷彰　伯酒井忠正　作間綱太郎　櫻井小太郎
櫻井省三　櫻井錠二　櫻田助作　笹村吉郎　笹本菊太郎　眞田秀吉　寒川恒貞
男四條隆英　志賀信光　清水一德　○清水釘吉　清水槌太郎　清水澄　清水與七郎
○斯波孝四郎　男斯波正夫　○鹽田泰介　鹽原又策　重光簇　男幣原喜重郎　柴垣鼎太郎
柴田駒三郎　柴原龍兒　子澁澤敬三　澁澤正雄　澁澤元治　島重治　○島安次郎
島田藤　島谷敏郎　下鄕傳平　下村尙義　下村宏　○生野團六　白石元治郎
白岩龍平　新開壽之助　男周布兼道　栖原豐太郎　末永一三　○菅原恒覽　杉政人
杉浦宗三郎　杉谷幸藏　○杉山直治郎　鈴木梅太郎　鈴木貫太郎　鈴木孝雄　鈴木禎次

瀬戸强三郎　瀬戸保　○關口八重吉　關田駒吉　關野貞　關藤國助　關屋忠正
膳桂之助　十河信二　○子曾我祐邦　曾禰達藏　曾山親民　太刀川平治　田島房太郎
田代義德　田所美治　田中豊太郎　田中豊輔　田中正夫　田中芳雄　田中隆三
田中舘愛橘　田邊朔郎　田賀奈良吉　高石庫治　高木貞治　高倉作太郎
高洲清二　高瀬彌九郎　高田早苗　高田善彦　高田直屹　高津清　高辻奈良造
高橋三省　高橋辰次郎　高橋義雄　高松豊吉　瀧精一　瀧山與　竹内維彦
竹中藤右衛門　竹村勘恵　竹屋金太郎　男武井守成　武田五一　武田秀雄　武田良太郎
立川龍　辰野隆　棚橋一郎　棚橋寅五郎　谷井鋼三郎　谷口守雄　谷村豊太郎
玉村勇助　○俵國一　俵孫一　男國伊能　千秋謙治　中條精一郎　津田藤左衛門
津田素彦　○塚本靖　男辻太郎　辻善之助　土田鐵雄　土屋純一　堤正義
鶴見左吉雄　寺田寅彦　寺野寛二　戸谷亥名藏　土岐嘉平　東福寺正雄　德富猪一郎
利根川守三郎　○男富井政章　伴野乙彌　朝永正三　鳥越欽之助　那波光雄　内藤久寛
直木倫太郎　中井四郎　中井勵作　中大路氏道　○中川吉造　中川小十郎　中川末吉
中川正左　中川鐵彌　中川友次郎　中西四郎　中野金次郎　中野深　○中原岩三郎
中松盛雄　中村鎌介　○中村幸之助　中村清二　中村達太郎　中村與一郎　○中山秀三郎
中山龍次　永井專三　永村清　永持源次　長尾半平　長岡半太郎　長岡隆一郎
長野宇平治　男長松篤棐　長與又郎　成瀬隆藏　南條金雄　丹羽重光　○丹羽鋤彦

新田留次郎　西尾銈次郎　西川虎吉　西田博太郎　西出辰次郎　西松唯一　西村小次郎
西本健次郎　○西脇吉久　根津嘉一郎　○野田鶴雄　野村一郎　野村龍太郎　野依辰治
納富磐一　登坂小三郎　長谷川久一　長谷川治良　萩尾傳　橋本圭三郎　秦佐八郎
○八田嘉明　○初見五郎　服部宇之吉　○服部漸　鳩山一郎　鳩山秀夫　濱田彪
早川德次　林猶之介　男林權助　林春雄　原邦造　原靜雄　原田貞介
伴宣　日高胖　久茂榮　菱川萬三郎　土方久徵　○平井喜久松　○平賀讓
男平沼騏一郎　平山信　廣瀬久忠　○廣田理太郎　深尾七郎　福井菊三郎　福田馬之助
福田豐　福地文一郎　男福原俊丸　藤岡淨吉　○藤島範平　男藤田平太郎　藤林東太郎
藤原銀次郎　藤原松三郎　二上兵治　古川阪次郎　男穗積重遠　星野錫　細田安兵衛
堀啓次郎　堀將之　堀江季雄　堀切善次郎　本多光太郎　本田貞次郎　○本間廣清
馬淵銳太郎　眞島健三郎　眞島利行　眞島正市　○眞野文二　前川貫一　曲尾辰次郎
牧銳夫　牧彦七　○牧田環　牧山耕藏　○正木直彦　柾丹治　增田義一
增永元也　松井清足　○松井元太郎　松浦圓四郎　松川義造　松下長久　松代松之助
○松田竹太郎　松田登三郎　松田虎喜代　松田源治　松永安左衛門　○松波仁一郎　松繩信太
松野千勝　松野鶴平　松原行一　松村鶴藏　松本學　○松本健次郎　松本烝治
松本須吉　松本亦太郎　丸田覺　男三井高公　三池貞一郎　三浦謹之助　○三上參次
三木善太郎　三谷一二　三根正亮　三邊長治　三宅秀　三宅川百太郎　三山喜三郎

三好重道　三好學　三輪震一　三輪時雄　美濃部俊吉　美濃部達吉　箕原勉
右田半四郎　水田政吉　水谷叔彦　水野敏之丞　水野錬太郎　密田良太郎　湊一麿
宮入慶之助　宮川清　宮口竹雄　宮長平作　武笠清太郎　武藤盛雄　向井哲吉
村井二郎吉　村上恭一　村上武次郎　村木正憲　村越三四郎　村瀬錬治郎　室田義文
目良恒　○名井九介　○持田巽　元田肇　○本野亨　百田貞次　森蠡昶
森清右衛門　森平兵衛　○森井健介　森島庫太　森田茂吉　森村市左衛門　諸戸北郎
八代則彦　矢野恒太　矢野道也　安川雄之助　安田繁三郎　安田善四郎　安田善次郎
山内鎭一　○山内不二雄　山家信次　山口喜三郎　山口準之助　山口昇　山口勝
山崎覺次郎　山田龜治　○山田三良　山田新一郎　山田眞吉　山田七五郎　山田利平
山村鋭吉　山本榮男　山本幸男　山本新次郎　山本信要　山本条太郎　山本忠興
男山本達雄　山本留次　山本十起雄　山本武藏　山本祐德　山脇春樹　湯澤三千男
結城豊太郎　横井實郎　○横河民輔　横田文吉　横堀治三郎　横山榮太郎　吉川祐輝
吉田靜致　吉田豊彦　吉野信次　吉野傳治　吉町太郎一　吉本龜三郎　吉山虎市
米澤與三七　米村敏郎　米元晋一　和田英作　和田英松　和田嘉衡　男若槻禮次郎
脇水鐵五郎　渡邊勝三郎　渡邊貫三郎　渡邊三郎　渡邊仁　子渡邊千冬　渡邊得男
渡邊俊雄　渡邊嘉夫　渡邊六郎

以上六百六十一名

年譜

皇紀	年號	干支	西暦	年齢	記事
二五一四	安政元	甲寅	一八五四	一	閏七月十二日江戸蠣殼町の姫路藩中屋敷に生る。幼名は兵庫郎、次に造次、諱は孝肅、後公威と改む、世阜、孤臺、不爭、玉泉等の號あり。
二五一五	同二	乙卯	一八五五	二	十月二日夜江戸の地大に震ひ、中屋敷の邸宅傾斜甚し、家人は前庭に疊を敷き、先生を擁して數日を送りしと云ふ。
二五一六	同三	丙辰	一八五六	三	
二五一七	同四	丁巳	一八五七	四	
二五一八	同五	戊午	一八五八	五	祖父孝友翁姫路藩元締役として大手前の姫路藩上屋敷に轉住し、爾來先生は上屋敷に於て養育せらる。
二五一九	同六	己未	一八五九	六	